

炎ノ疑診ヲ付シ主治醫ニ託ス七月二十一日來院曰ク七月初ヨリ腹部漸々縮小シ熱發セス心思又快ナルモ下腹ニ硬結物ヲ觸ル由テ更ニ診ヲ乞フト之ヲ診スルニ言ノ如ク腹部弛緩縮平スト雖正形ノ腫臍以下ヲ充タシ右方ハ腸骨窩部ニ於テ鏡ク限界スト雖上下及左方ハ其限界嚴然タラス壓スルモ痛ナク平滑ナル表面ニ小凸角アリ少シモ移動セシムルヲ得スレハ帶鼓濁音ナリ内診スルニ子宮ハ異狀ヲ認メス後穹隆部ニ硬結ヲ觸レ雙合診ニヨリ腫瘍ト内外相應ス下腹ノ惡性腫瘍兼慢性腹膜炎ト診シ摘出シ難キ者ト察シ強テ手術ヲ勸メス九月ヨリ再ヒ緊滿發熱十月ニ至リ遂ニ死亡セリト云フ

右症例ハ金澤病院婦人科部ニ於テ部長小川教授ノ下ニ前醫員岡本京太郎等ト共ニ實驗セシ處ニ據リ其梗概ヲ記セシノミ

## ◎ 僞盲ノ鑑定

渡 孚 貞

「百讀一診ニ如カス」トハ嘗テ佐藤學士ノ實用產科學書中見出シタル箴言ナリトス宣ナル哉言ヤ余眼科學ニ將タ法醫學ニ懇懇ナル恩師カ高教誘示ヲ恭フスル實ニ久シカラストセス而モ面リ其實例ニ接スルノ機ニ乏シク轉々隔靴搔痒ノ感ニ堪エサル者多シ蠢愚素其大因ヲナスト雖正一診ヲ得サルノ不幸亦與ルナキ能ハス殊ニ彼ノ僞盲看破法ノ條ヲ繙ク毎ニ常ニ層一層其感深ク先學ノ士活眼一睨立所ロニ邪者ヲシテ畏縮セシメタル當時ノ快ヲ想フテ羨慕眞ニ措キ難シ偶々本年八月郷ニ歸

リ或ル好機ニ接シテ某醫家(甲)カ介手トナリ遂ニ一偽盲者看破ノ實ヲ舉ケタリ身素ヨリ其主タル能ハサリシト雖モ尙心自ラ濶ラキ且ツヤ日常百讀遂ニ其解ヲ得サリシ疑塊モ釋然悟リ得ルノ幸ヲ獲タリ乃チ會誌ノ余白ヲ瀆カシ冒頭先ツ其實例ヲ陳ヘ更ニ號ヲ追フテ余カ自ラ得タルノ幸ヲ同窓諸兄ニ頌マントス

第一章

實例

事實ハ○○縣○○郡ニ起リシ一家同胞間ノ劇闘ナリトス。伯兄某死シテ遺產饒シ仲兄(被害者)他家ニアリ進ンテ兄ノ遺兒ヲ補ケテ之ヲ護ル一弟李兄ト伯兄ノ遺兒トヲ煽動シテ之ヲ奪ハント謀ル乃チ暗ニ乘シテ仲兄ヲ要撃シ之ヲ斃ス而モ彼レハ數日ニシテ蘇生シ此等三名ハ縛ニ就ク法衙ハ命ヲ發シテ在郡ノ某醫(乙)ニ被害者創傷ヲ鑑定セシメ判官之レニ依ツテ加害者三名カ罪ヲ問ハントス偶々被害者ハ突然左眼ノ失明ヲ訴フ更ニ乙醫ノ鑑査ニヨリ遂ニ失明ニ決ス而モ加害者辨護士ハ之ヲ當レリトナカス進ンテ甲醫ニ命シテ再鑑定セシメラレンコトヲ申請シ容ル、所トナル則チ甲醫ハ余ニ介手ヲ命シ細心被害者左眼ヲ詳驗シ遂ニ左ノ鑑定書ヲ作りテ之ヲ出ス

鑑定書

○○○、○○○、○○○、○○○、○○○

○○ ○ ○ ○ ○ ○

○○○、平民農

右〇〇〇〇全〇〇〇〇全〇〇〇歐打創傷被告事件ニ就キ明治三十一年八月十二日〇〇〇〇地方裁判所刑事部判事裁判長〇〇〇〇殿ヨリ左ノ鑑定ヲ命セラレタリ

(第一) 被害者〇〇〇ノ左眼ハ失明セルモノナルヤ否ヤ

(第二) 若シ失明ノモノトスレハ被害者〇〇〇カ有スル頰面及ヒ頭部ノ創痕ハ之レカ元因タルヤ否ヤ

(第三) 若シ失明セルモノトスレハ一時的ノ失明ナルヤ將タ永久的ノ失明ナルヤ

依テ同年同月十三日十四日及ヒ十五日ノ三日間ニ於テ被害者〇〇〇ニ就テ眼科的診査及ヒ前鑑定人〇〇〇、〇〇〇、ノ鑑定書ヲ審査シ右三項ニ就キ鑑定スルコト左ノ如シ

(甲) 驗査記録

(第一) 左眼ノ檢査

(壹) 肉眼的諸檢及ヒ増大鏡檢査ニヨルニ上下眼瞼結膜睫毛角膜前房水晶体及ヒ是等副黑涙腺淚道等ニ異常ナシ

(貳) 瞳孔散大シテ殆ント直徑六「ミリメートル」ニ至リ光線ニ對シテ直接反應ナシ然レモ右眼ニ光線ヲ射入セシムルニ左眼瞳孔ニ反應ヲ呈ス(所謂關係的反應)

(參) 檢眼鏡ヲ以テ眼底ノ倒像及ヒ直像檢査ヲ行フニ視神經乳頭ノ外上方ニ於テ其側側ヲ乳頭ニ向ケタル弓狀ノ出血線アリ其ノ長徑乳頭直徑ノ三分ノ一ナリ

(四) 同様ノ檢査ニヨルニ硝子体ハ異常ヲ呈セス

(五) 内壓ハ「 $\rho$ 」(即チ較々減少セルカ如シ)

(六) 官能的檢査

(イ) 被害者ハ自ラ明瞭ヲ辨セスト訴フ

(ロ) 十五度ノ「プリスマ」ノ基底ヲ外方ニ向ケ之レヲ左眼前ニ裝ヒ六「メートル」ヲ距テタル燭火ヲ凝視セシムルニ左右二個ノ燭火ヲ看ルト訴フ此際ニ於ケル左眼ノ内外運動ハ明カナラス

(ハ) 十五度「プリスマ」ノ基底ヲ以テ右眼瞳孔ノ正中ニ於テ地平ニ其ノ下半部ヲ遮リ左眼ヲ手ニテ掩ヒ六「メートル」ノ巨離ニ在ル燭火ヲ看視セシムルニ上下二個ノ燭火ヲ看ルト訴フ爰ニ於テ左眼ノ手ヲ去ルト同時ニ右眼瞳孔ヲ全部「プリスマ」ヲ以テ掩フテ尙ホ二個ノ燭火ヲ看ルヤト問フニ上下ニ各々一個ノ燭火ヲ看ルト訴フ(燭火ノ二個ヲ看ル)

(ニ) 左眼ニ平面眼鏡ヲ裝ヒ右眼ニ二拾D(デオアトリー)ノ凸面眼鏡ヲ裝フテ六「メートル」ノ距離ニ在ル「スネルレン」氏試視力表ヲ諦視セシムルニ四十號迄明答シ得然ルニ左眼ヲ掩ヒ或ハ凹凸眼鏡ノ強度ノモノヲ裝フ時ハ其表ヲ看ルヲ能ハザルニ至ル

(ホ) 暗室内ニ導キ兩眼ヲ仰視セシメ平面反射鏡ヲ以テ右眼又ハ左眼ニ交互燈光ヲ反射セシムルニ左眼ニ反射セシメル場合ニ於テモ其光輝アルヲ訴フ

(ヘ) 右眼ヲ縋帶ヲ以テ閉鎖シ或ル指ノ一端ニ觸レ彼レヲシテ更ラニ他手ノ指ニテ其ノ部ヲ指觸ス可シト命シタルニ彼ハ徐々ニ指根ヨリ觸レテ次第ニ前進シ指端ニ及ヒテ指示ス

(ト) 眼底檢査ヲ行フニ際シ黃斑部ニ強ク燈光ヲ射入セシムルニ眼球ヲ振戦ス

(チ)右眼ニ平面赤色硝子眼鏡ヲ裝ヒ左眼ニ無色平面眼鏡ヲ裝ヒタルニ白黃紅桃紅等ノ色毛糸ヲ殆ント同色ナリト答ヘ赤色硝子眼鏡ニ代フルニ綠色硝子ヲ以テスレハ黑蝦等ノ色毛糸ヲ殆ント同色ナリト答ヘタリ

(リ)四「メートル」ノ距離ニ於テ二分ノ一「メートル」ノ間隔ヲ以テ二枚ノ「スネルトン」氏視力表ヲ置キ更テニ彼レノ鼻梁ニ沿フテ檢者ノ手掌ヲ當テ右眼ハ右側ノ表ノミ左眼ハ左側ノ表ノミヲ看得ル様ニナシ左側ノ表ニ就テ視力ヲ檢セルニ少シモ看エスト答フ

(ヌ)右眼ヲ繙帶ヲ以テ閉鎖シ室内ヲ步行セシムルニ徐々ニ歩シ障礙物(椅子等)アレハ之レニ衝突シテ后チ手ヲ以テ側ニ其ノ物ヲ除キテ前進セリ

### (第二) 右眼ノ檢査

他覺的毫モ異常ヲ認メス視力ハ五分ノ六ニシテ屈折機調節機等ニ異常ナシ

### (第三) 頭蓋及ヒ顔面創傷癍痕ノ檢査

(ル)右顛頂ニ於テ前ハ矢狀縫合冠狀縫合ノ接際部ヨリ起リ后方ニ走リ右顛頂結節ニ達シ約拾「センチメートル」ノ線狀癍痕アリ其部頭毛ヲ有セス又タ骨膜トノ癒着ナシ

(ヲ)左顛頂結節上前方四「センチメートル」ノ部ニ豆大ノ禿髮部アリ少シク陷凹セリ

(ワ)左顴骨部ニ於テ下眼瞼縁下中點下二「センチメートル」ヲ距テタル部ヨリ横ニ外聽道ニ向ヒ長サ三「センチメートル」ノ線狀癍痕アリテ皮面ヨリ陷凹シ外端チ中點トシ更テニ星狀ニ周圍放線狀ヲナシテ同様線狀ノ癍痕アリ共ニ硬ク骨面ニ癒着セリ

(カ) 左口角ヨリ左下顎隅ニ向ヒ長サ三「センチメートル」ノ線狀癢痕アリ其ノ部ノ口腔粘膜ハ頰部齒齦ニ硬ク癒着シテ移動シ難シ

(乙) 説 明

左眼ノ視力ハ健全ナルヤ否ヤヲ確定スルニハ先ツ右眼ヲ詳檢シテ是レニ對照セサル可カラズ然ルニ右眼ノ健全ナルコトハ第二項ニ依テ明カナリ

次テ左眼ハ彼レカ訴フル如ク果シテ明暗ヲ辨セサル迄ニ失明セルモノナルヤ否ヤ

以上檢査ノ成績ニ依リテ説明セントス即チ(六)官能の檢査ノ(ロ)ヨリ(ヌ)ニ至ル九項就中(ロ、

ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、ヌ)ハ左眼カ尙幾許カノ視力ヲ有スルヲ証スルモノニシテ殊ニ(ニ)項ハ少ナクモ

<sup>6/40</sup>ノ視力アルヲ証明スルモノナリ今簡單ニ其理ヲ解カシ

(ロ)ノ理解。左眼ニ「プリスマ」ヲ裝ヒ複像ヲ訴フルハ之レ左眼ノ尙ホ視力ヲ有スルノ証ナリトス即チ「プリスマ」ノ作用ニヨリ燭火ノ假像ヲ生シタルモノニシテ偏眼者ニ起ル現象ニアラス

(ハ)ノ理解。最初左眼ヲ全ク蔽ヒ且ツ右眼瞳孔ヲ半ハ遮斷スルニ當リテハ偏眼複視ヲ生スルモノ

ニシテ彼レノ答ハ正當ナリ然ルニ左眼ノ手ヲ除クト共ニ「プリスマ」ヲ以テ右眼ヲ全蔽スルニ尙

ホ複像ヲ看タルハ之レ視力ヲ有スルヲ証スルモノナリ其理前項ニ同シ

尤モ「プリスマ」試驗法ハ絶對的ニ確實ナルモノトハ斷言シ難シ如何トナレハ偏眼ノモノト雖モ尙

ホ時々「プリスマ」裝用ニ依テ複像ヲ看ルコトアレハナリ然レモ今日ノ場合ノ如キ左眼ヲ掩フ時ハ單

像ヲ看ルヲ以テ見レハ此破格ノ場合ニ屬ス可キモノニアラサルコトハ明カナリトス

(ホ)ノ理解。之レ殊更ニ卑近ナル試験ヲ行ヒタルモノニシテ彼レノ意ヲ迷ハシメテ左眼尙ホ能ク光感ヲ有スルヲ証スルモノナリ

(ヘ)ノ理解。真正ニ左眼失明(盲)セルモノナレハ右眼ヲ掩ヒタルニ際シ殊更ニ指根ヨリ擦觸シテ其觸レタル部ニ及フ事ナシ試ミニ眼ヲ閉チテ自ラ一示指端ヲ以テ他手ノ指端ヲ指示スルヤ直接其ノ部ヲ示シ得ルハ易々タル事ノミ然ルニ僞盲者ハ殊ニ人ニ悟ラレンコトヲ恐レテ愚ニモ指根ヨリ擦リ當テル如キ真似スルヲ通常トス

(ト)ノ理解。黃斑部ハ光線ニ對シ最モ銳敏ナル部ナルカ故ニ羞明ニ堪エスシテ眼球ヲ振戦セシナラン

(ニ)ノ理解。此検査ハ尤モ能ク左眼ノ視力全滅セサルヲ詳細ニ証セシモノニシテ右眼ハ已ニ廿Dノ凸鏡ヲ以テ掩ハレツ、モ(此凸鏡ヲ健眼ニ装フキハ已ニ〇、五メートル以外ノモノヲ看ルコトナシ)「ステルレン」氏試視力表ヲ明視シ得テ而モ四十號迄テ及ヘルハ之レ全ク左眼ヲ以テ看タルモノナリ換言スレハ左眼ハ少ナクモ $\frac{6}{40}$ ノ視力ヲ有スルモノナリ

(チ)ノ理解。此試験ハ結果陰性ナリキ若シ偏眼盲ナラサルニアリテハ赤又タ綠色硝子ニ掩ハレサルカ故ニ能ク白、赤黃及ヒ黒蝦ヲ辨別シ得可キナリ然ルニ吾人カ恰モ偏眼ヲ閉チテ他眼ニ赤色硝子ヲ装フテ看タル際ノ如ク赤色硝子ノ爲ニ白赤黃ヲ同一色トナシ綠色硝子ノ爲メニ黒蝦ヲ同一色トナセルハ左眼ノ視力ナキモノ、如シ依テ尙ホ之レヲ確メンカ爲メニ〇〇堂醫院病室ニアル某患者ノ一眼ハ健康ニシテ他眼ハ「メートル」位ニ指數ヲ辨スル者ニ同様試験ヲ施シタルニ患眼ナ

開スルニモ係ラス白黃赤又ハ黒蝦ヲ同一色トセリ依テ見レハ此成績ハ容易ニ信シ難シ

(リ)ノ理解。此試驗モ亦タ左眼ノ失明ヲ証スルモノ、如シト雖モ未タ容易ニ信テ措キ難シ如何ナレハ左右異リタル二葉ノ表ヲ掲ケルカ故ニ左眼側ノ表ヲ看エスト答ヘ得ルハ易々タル事ノミ況ンヤ左眼ノ實際視力障害アルニ於テオヤ

(ヌ)ノ理解。右眼ヲ閉鎖スルヤ信ニ左眼盲スルモノニアリテハ突然障礙物ヲ以テ途中ヲ遮ルヤ先ツ己レ自ラ之レヲ避ケテ通行ス可キヲ普通トス然ルニ此場合ニアリテ彼レハ物ノ大小ヲ既ニ辨知セルカ如ク而モ之レヲ詐ハラントセルカノ如ク徐々歩行シテ其ノ物体ヲ除去シツ、前進セルカ如キハ蓋シ眞ノ盲者ニ見サル所ナラン

以上數種ノ試驗中(ニ)ヲ以テ最モ明確ニ○○○ノ左眼カ全ク失明セサルヲ知レリ殊ニ數回ノ試驗常ニ同一ノ結果ヲ得レハ益々信ヲ深クスルニ足ル

次に説明セントスルハ左眼ノ視力障害ハ顔面創痕トノ關係ナリトス換言スレハ左眼ハ全ク失明セスト雖モ視力ハ下リテ  $6/40$  ニ減少シアルヤ明カナリ然ラハ果シテ其視力減少ノ元因ハ如何、他ナシ彼レカ有スル處ノ(第三)(ワ)即チ左下眼瞼下ノ創痕ヲ其元因ト認メテ可ナラン想フニ被害時左下眼窠壁ニ劇裂ナル暴力ヲ受ケ爲メニ其ノ部ノ骨格ニ挫裂ヲ來シ延ヒテ視神經管ノ損傷ヲ招キ其内ヲ通過スル處ノ視神經ハ管内ニ於テ損傷セシモノナラン抑々視神經其ノ同名骨管内ニ於テ損傷或ハ斷裂スル時ハ眼底ニ變化ヲ認メシテ視力減少或ハ失明スルコトハ成書己ニ記載セリ然レモ其ノ視神經カ果シテ斷裂シアルモノナルヤ否ヤハ或ハ數ヶ月ノ經過ヲ窺フニアラサレハ明知シ難



シ若シ數週或ハ數ヶ月ニシテ眼底檢査上視神經乳頭ノ萎縮ヲ始ムレハ之レ不治ヲ宣告スルモノナ  
リ尙ホ乳頭ノ上外方ニ存スル出血ハ損傷ニ因スルヤ歴然タリ加之左眼瞳孔ノ散大シテ關係的反應  
ノ存在スルハ益々視神經ノ同名管内ニ於テ損害セラレタルヲ証スルモノニシテ即チ未ダ動眼神經  
ニ向テ分歧セサル前ニ損セラレタルヲ以テ左眼ヨリ光線ヲ射入スルモ動眼視神經核ニ達セスト雖  
モ右眼ヨリ射入シタル光線ハ良ク常道ヲ經過シテ動眼神經核ニ刺戟ヲ及ホシ爰ニ關係的瞳孔反應  
ヲ呈シタルナル可シ

(丙) 鑑定

(第一)○○○ノ左眼ハ現今視力 $6/40$ ニ減少セシモノニノ全ク明ヲ失シタルモノトハ恐クハ言ヒ  
難シ但シ $6/40$ ノ視力ヲ有スレハ仮令他眼ハ盲スルトモ緻密ヲ要スル職業(仮令讀書等)ノ數ニア  
ラサレハ就業ヲ得

(第二)○○○ノ左眼視力減少ハ恐クハ顔面左下眼窠壁ノ創傷ニ基クモノナラン

(第三)此視力減少ハ此儘止マル可キモノナルヤ將タ猶増悪シ遂ヒニ全ク失明ニ陥リテ永久不治ノ  
モノナルヤハ今後數週或ハ數ヶ月ノ經過ヲ見ルヲ要ス成書斯ノ如キ場合ニ於テハ失明ハ到底免カ  
ル可カラサルモノトセリト雖モ而モ學理上ニ於テ未ダ乳頭ノ萎縮ヲ認メサルニ於テハ其ノ治、不  
治ハ全ク不明ナルモノトス  
右及鑑定候也

鑑定時間明治三十一年八月十三日ニ始リ全十五日午前十一時ニ終ル

明治三十一年八月十八日

〇〇縣〇〇〇市〇〇町〇〇〇番地

鑑定人

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇 殿

九月下旬甲醫ヨリ來書アリ右事件公判ノ結果加害者三名ハ各重禁錮拾ヶ月ノ刑ニ處セラレ遂ニ服罪セリト謂フ

(未完)

## 寄 書

醫學得業士 鈴木寛之助 纂譯

十九世紀理學的醫學ノ進歩ハ、駿々乎トシテ其抵止スル所ヲ知ラス、殊ニ醫學力、科學的基盤ヲ得テ、立脚ノ地歩ヲ形成セシ以來、學ニ術ニ益々其粹ヲ究ムルニ至リ、昨ハ血治療法、臟器療法ヲ臨床上ニ試ミ、玄妙ナル理論ヲ實際ニ應用シ、今ハろえんとげん氏X線テフ空前特種ノ發見アルヤ、敏捷ナル醫學者ハ直ニ探テ以テ我醫界ヲ照ス。嗚呼熾ンナラスヤ。蓋シ原因學上治療學上ノ大進歩ト共ニ、診斷學上ニ於ケルX線ハ、本世紀末ノ紀念トシテ、吾曹醫學者ノ注目ヲ牽クニ足ルモノナラシ。且ヤ已ニ幾多ノ實地家ハ、此ノ驚クヘキX線照輝ノ下ニ、往時剖檢ノ結果ニアラサレハ、認め得サリシ病竈ヲ目前ニ曝露シ、最モ精密ニ、最モ確實ニ、加カモ簡單ニ、知ルヲ得ルト云フノ報道、續